世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

昭南興亜訓練所と南方特別留学生に関与した仏教者：浄土真宗本願寺派僧侶の金谷哲麿

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 大谷光瑞, 第二次世界大戦, マレー半島, 日本軍政, 日本占領下東南アジア 作成者: 大澤, 広嗣 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1035

Tetsumaro Kanaya: A Buddhist Priest in the *Jodo Shinshu Hongwanji-ha (Nishihongwanji)* Involved in the *Shōnan Kōa Kunrenjo* and the *Nanpō Tokubetsu Ryūgakusei*

ŌSAWA Kōji

Key words

Kōzui ŌTANI / World War II / Malay peninsula / Japanese military administration / Japanese occupation of Southeast Asia

Summary

During World War II, the Imperial Japanese Army invaded Southeast Asia and occupied the captured regions. The military administration was staffed by army officers and civilians from mainland Japan.

Tetsumaro Kanaya (1895–1945) joined the religious staff of the military administration during the course of Japan's occupation of British Malaya (now Malaysia). Kanaya was a priest of the *Jodo Shinshu Hongwanji-ha (Nishi-hongwanji)*. Under the influence of Kōzui Ōtani (1876–1948), the former 22nd head priest of the *Nishihongwanji* and a monk renowned as a pan-Asianism proponent, Kanaya became interested in Southeast Asia and Islam.

During the early 1940s, Kanaya conducted extensive research in the Dutch East Indies (now Indonesia) and in Taiwan. Subsequently, he was inducted as a civilian employee of the Indochina Expeditionary Army Corps of the Imperial Japanese Army. During Japan's occupation of Malaya, he became a top instructor at the *Shōnan Kōa Kunrenjo* (Asia Development Training Institute) and taught Japanese to the young Malay students, many of whom would become the future leaders of their country.

Kanaya brought many of his students from Malay to Japan. Some pursued higher education at mainland Japanese universities such as *Nanpō Tokubetsu*

Ryūgakusei (Special Foreign Students from Southeast Asia). After World War II, a number of the graduates from this program became Malaysian leaders.

昭南興亜訓練所と南方特別留学生に関与した仏教者
――浄土真宗本願寺派僧侶の金谷哲磨――

大　澤　広　嗣

昭南興亜訓練所と南方特別留学生に関与した仏教者

――浄土真宗本願寺派僧侶の金谷哲磨――

大澤広嗣

〈キーワード〉大谷光瑞／第二次世界大戦／マレー半島／日本軍政／日本占領下東南アジア

一　はじめに

（1）本論の目的

かつて、第二次世界大戦期に、日本占領下のイギリス領マラヤ（現・マレーシア及びシンガポール）にて、現地青少年に日本語教育と将来の官吏として人材育成に関わった仏教者がいた。真宗本願寺派（現・浄土真宗本願寺派、通称・西本願寺）僧侶の金谷哲磨（かなやてつまろ）（一八九五～一九四五）である。

当時の時代状況からすれば、あくまで「大東亜共栄圏」の指導者である日本に貢献する人材の育成であった。しかるに青少年達は、戦後のイギリスからの独立後に、マレーシアの発展に貢献した人物が複数いたのである。

そもそも、一九四一（昭和一六）年一二月の対米英への宣戦布告後、日本陸軍はマラヤ（日本占領後はマライに改称）へ侵攻して、一九四二年二月にはマレー半島最南端のシンガポールを占領した。その後、軍による

行政すなわち軍政を実施したが、武官（軍人）だけでは行政組織が機能しないため、各省庁から文官（官吏）を動員したが、定員を充足させるため、その行政分野に詳しい民間人を任用して事務に当たらせたのである。

宗教行政には宗教者や宗教研究者が動員されたが、金谷はその一人である。金谷は、開戦前には東南アジアの視察経験があり、現地での信徒数が多いイスラームに関心を示した人物であったゆえに、マラヤに派遣されたのである。

本論を記す目的として、第一に、先行研究において金谷の人名が誤って伝えられてきたため、情報の更新を目的とすることである。履歴を詳細に検証するが、空白部分も多々あるため、現時点で判明した事項を整理する。

第二に、日本軍の現地占領後の軍政実施に際して、動員された仏教者の実態について解明することである。先に筆者は、戦時下の南方に派遣された僧侶について調査を行った[1]。金谷が関与した昭南興亜訓練所の教育及び南方特別留学生の日本本土への引率については、検証が及ばなかった。金谷を取り上げることで、戦時下の僧侶動員の実態がより明らかになる。

（2）更新する事項

近代日本仏教のアジア布教史に関する先行研究の一つとして、小島勝・木場明志編『アジアの開教と教育』（法藏館、一九九二年）があり、「第Ⅱ部第一章　本願寺派開教使の日本語教育」において次の記述がある。本論の対象となる人物の周辺状況が分かる記述なので、長文になるが引用する。

マレー興亜訓練所「占領下」の開教使の日本語教育の事例として、次にマレー半島マラッカにおける日本語教育をとりあげよう。現在、新潟県長岡市・〔浄土真宗本願寺派。以下、亀甲括弧は引用者の注記〕

徳宗寺住職で、陸軍司政官としてシンガポールおよびマラッカに赴任した井上憲司師によれば、昭和十八年、「マレー興亜訓練所」を開設し、マレー人に徹底した日本語教育、皇国民教育を実施したという。井上師は正式の西本願寺本山よりの辞令はもらわなかったが、西本願寺経由で陸軍省からの書面審査を通過し、大谷光照門主にも謁見の機会を得て、シンガポール地域の宗教事情の蒐集の役割を帯びて渡南の途についた。昭和十七年六月三日のことであるが、日本軍の手に落ちた昭南島の軍政幹部〔正しくは軍政監部〕の所属であった。同じ役割を担ったのは、曹洞宗の僧侶で元・駒沢大学教授・渡辺楳雄師と真言宗の僧侶であった。／ところがシンガポールに着いても、これといった仕事がなく身をもてあましていたことから、同じ、九州の本願寺派の僧侶である金安師と「ひとつ現地人教育を始めようと話がまとまり、マラッカ市に『マレー興亜訓練所』を設立した」（井上憲司師談話）という。金安師はシンガポールに渡っていたという。[2]

その後、右記の内容は再編集されて、『浄土真宗本願寺派アジア開教史』（本願寺出版社、二〇〇八年）における「第一部第六章　東南アジア・南太平洋諸島における開教」に再録されたが、「九州の本願寺派の金安という僧侶」[3]の記述は残ったままであった。

実は、二か所の引用文中にある「金安」とは、本論で述べる金谷哲磨のことである。文中の情報は、井上憲司（一九〇九～一九八七）からの記憶に基づいた聞き取り調査によるが、調査時に井上は既に高齢で記憶も薄れていたため、この叙述は止むを得ない。

今なお『アジアの開教と教育』及び『浄土真宗本願寺派アジア開教史』は、日本仏教のアジア布教史に関する基本文献として重要である。井上から聞き取り調査をして執筆を行ったのは、龍谷大学文学部教授（現・名誉教授）の小島勝氏である。日本各地の関係者から貴重な証言を得て記録に残した。聞き取り対象はすでに物

故者であり、今となっては当事者の証言として、事実関係を公文書等の一次資料から裏付けを取れば、両書は大いに参考となる。後学者として小島氏に謝意を表し、記述内容の更新を図りたい。

（3）『龍谷大学戦没者名簿』の掲載内容

『アジアの開教と教育』及び『浄土真宗本願寺派アジア開教史』の刊行後、金谷哲磨に関する略歴を紹介した文献が発行された。『龍谷大学戦没者名簿』（龍谷大学、二〇一一年）である。同書には、次のようにある。

金谷哲磨／明治二八年一月八日、大分県西国東郡高田町〔現・豊後高田市〕に生まれる。生家は、浄土真宗本願寺派妙寿寺。大分県立宇佐中学校〔現・県立宇佐高等学校〕卒業。大正二年仏教大学〔現・龍谷大学〕予科入学。大正四年本科入学、大正七年卒業。卒業後は、日本大学などで講師を務めるとともに、満州〔現・中国東北部〕、仏印〔フランス領インドシナ、現・ベトナムなど〕、蘭印〔オランダ領東印度、現・インドネシア〕などを視察した。／昭和一六年、シンガポールの興亜訓練所主事（マライ軍政監部付）となった。昭和一八年陸軍司政官に任官。昭和二〇年七月二二日、マレーシアで戦病死。五〇歳。[4]

『龍谷大学戦没者名簿』の刊行は、時代と社会の状況から刊行された書籍である。すなわち、戦争体験者が減少するなか、戦後五〇年を迎えた一九九五（平成七年）年頃から、全国の国公私立の各大学で、学徒出陣で戦地に赴いた学生の名簿整備、大学と戦争との関わり、大学出身の戦死者を慰霊する機運が顕著に見られるようになった。龍谷大学でも、この動きを受けて、遺族を調査して名簿の整備に至ったのである。次項以降から、金谷の足跡について、詳しく見ていこう。

二　仏教大学の卒業と本願寺派の人脈

（1）　仏教大学の卒業まで

金谷哲麿が生まれたのは、大分県豊後高田市の浄土真宗本願寺派妙寿寺である。享禄四年（一五三一）の創建とされるが、その由緒は、「新田義貞の一族である金谷修理大夫経氏の末裔の金谷休喜は蓮如に従って出家得度し当時の開基となった。その子道明は顕如に奉事しのち慶長九年〔一六〇四〕准如〔本願寺第一二世法主〕より現寺号〔妙寿寺〕を賜わった」[5]という。

本堂は、帝室技芸員の佐々木岩次郎（一八五三～一九三六）が一九〇二（明治三五）年頃に設計したものである。木造平屋建ての入母屋造りで本瓦葺きの壮麗な建物は、大分県での近代寺院建築の好例として、経蔵・鐘楼・中門・山門とともに、国の登録有形文化財に指定されている。金谷は、後に第一七世住職を務めている。

大分県立宇佐中学校を経て、京都の仏教大学で学ぶことになる。一九一三（大正二）年に予科へ入学して、一九一五（大正四）年から一九一八（大正七）年まで本科に学んだ。この頃の世相は、一九一四（大正三）年七月に第一次世界大戦が勃発して、一九一五年には「対華二一箇条要求」を出した時代である。一九一八年の本科卒業生は、次の四二名である。

麻布賢秀、伊藤勝秀、上野覚雄、大原義躬、小笠原秀昱、岡田（須賀）教准、岡村敬譲、小倉康性、小野田義敞、勝山謙譲、金谷哲麿、菊池晃玄、斉藤俊諦、真田広隆、多賀義仁、高橋峻嶺、武田浄寛、竜川成準、出目常宣、寺本慧達、鳥井真証、長尾芳登、中野春隆、中原晃観、中山雷濤、西住憲正、秦高道、秦正譲、林労謙、原田義海、藤本竜暁、古井博仁、堀川宣道、松尾実成、松山良純、宮川（田阪）晃徳、守重哲也、柳川（藤本）慧達、柳谷（厳寺）澄竜、山達北陸、横井信空、渡辺義乗[6]

当時の仏教大学は、「専門学校令」（明治三六年勅令第六一号）による専門学校であった。一九二二（大正一一）年一一月五日には、「大学令」（大正七年勅令第三八八号）に基づく大学に昇格して、龍谷大学となる。

（2）東京時代と小松雄道、そして大谷光瑞

金谷は、アメリカに留学して、その後に東京へ居を移して活動の場所を求めた。『龍谷大学戦没者名簿』によれば、日本大学講師を務めたとある。たしかに、一九三五（昭和一〇）年度の日本大学法文学部宗教学科における開講科目を見ると「回々教（小松）／回々教（金谷）」[7]とあり、一九四〇年に同大学講師の肩書で講演を行っていることが確認できる。[8]東京時代の金谷を知るうえで、「小松」と「回々教」（フイフイきょう。当時の「イスラーム」の呼称）は、重要な鍵となる概念である。

まず「小松」なる人物は、小松雄道（こまつゆうどう）（一八九三～一九七九）のことである。小松は、真宗本願寺派の僧侶で、日本大学の法文学部宗教学科と専門部宗教科で教鞭をとり、学監を務めていた。[9]当時、同大学では両科を合わせて「日本大学宗教科」と通称していた。

小松は、一九二五（大正一四）年から一九二七（昭和二）年まで、アメリカに留学した。学生時代には同志社の英語演説会に参加するなど英語に興味を持っていた。また母方の伯父である工藤慧達（一八七八～一九三二）が、カリフォルニア州のサクラメント仏教会で開教使（一九〇七～一九二二年在任。帰国後は武蔵野女子学院学監）をしていたことから、[10]海外への関心があった。

さて金谷は、まずニューヨークに留学してコロンビア大学で一年間通ったが、英語学習のためニューヨーク州のポキプシーにある聖公会系のセント・スティーブンス・カレッジ（現・バード大学）に移った後に、ワシントン州のタコマにある本願寺派のタコマ仏教会で活動した。

小松は、アメリカで金谷と出会っていた。小松は、「〔メソジスト〕教会の下宿で知り合いになった人で……金谷哲麿氏がいた。彼はすでに三年前からニューヨークに滞在しており、私と知り合う一年前、本願寺の大谷尊由師〔一八八六～一九三九、第二二世法主光瑞の弟〕が渡米した際に、バッサー女子大学の見学を案内したということだった。（大谷師は帰国後、高楠順次郎博士に命じ武蔵野女子学園〔現・武蔵野大学〕を創立された）」[11]と述べている。金谷と小松は、ニューヨークの街頭で仏教演説を行うなど、互いに信仰と親交を深めた。

帰国後に金谷は、小松と共に行動する機会が増えた。両者は一九三一（昭和七）年三月に、「満蒙事情調査ノ上広ク米国々民ニ其真相ヲ普及センカ為視察旅行」[12]を行った。この時、陸軍省の便宜により客船には運賃を伴わない便乗扱いで大陸に向かった。大阪商船（現・商船三井）の大連航路を用いたが、陸軍省の文書によれば、同年三月一五日に神戸発の「はるびん丸」に乗り、日本が統治した関東州（中国の遼東半島先端部）の大連へ向かい、三月二九日には大連発の「ばいかる丸」に戻り門司で下船した。[13]

一九三二年といえば、三月一日に、清朝最後の皇帝（第一二代宣統帝）であった溥儀（一九〇六～一九六七）を執政（後・皇帝）とする「満洲国」の建国が宣言された時期である。まさに、小松と金谷は、建国直後の渡航であった。軍の文書によれば小松は「大学連盟委員　日本大学教授」、金谷は「大学連盟委員」の肩書で便乗した。「大学連盟」とは、一九三一年に発足した「全国大学教授連盟」のことで、小松は組織の中心人物であり、陸軍の支援を得て大学関係者として満洲に向かったのである。小松は、アメリカへの留学経験があったが、軍としても知識人たる大学教授らを介して、海外に満洲国建国の意義を伝える方法として有用と考えた。その任務と対応は、次のとおりであった。

満洲事変〔一九三一年〕直後同連盟から満洲視察員を派遣して同地を視察せしめた結果を全米各大学総長宛長文の調査書を英訳して送附したが今回更に第二回のメッセーヂを全米各大学総長に送ることになつ

た、その内容は「日満関係の歴史的考察」「満洲に対する日本の寄与」「支那人の性格」「日本の権益に対する侵害」等で逐次英訳して送ると[14]

小松は、一九三三年八月にも、「全国大学教授連盟　第二回満洲国事情調査研究委員」として現地に向かったが、この時に金谷は同行していない。[15]

なお、金谷哲麿と同じく、大分の高田出身の人物に、陸軍大将の金谷範三（一八七三～一九三三）がいた。哲麿と範三は、家族ぐるみの付き合いをしていたが、同姓ではあるが親族関係にはなかったようである。範三は、一九三〇（昭和五）年二月から陸軍参謀本部の長である参謀総長を務めるも、在任中の一九三一年九月に関東軍が独断で起こした満洲事変が起きるのである。同年九月に軍事参議官となり、一九三三（昭和八）年六月に死去する。一九三二年の「全国大学教授連盟」の満蒙事情調査では、陸軍から便宜が与えられたが、範三が関与したかどうかは定かではない。

また金谷は、既に西本願寺の法主を引退した大谷光瑞の著作『世間非世間』の編集を手掛けている。[16]「世間」は社会、「非世間」は仏教の教えを指す。光瑞の口述を金谷が筆録して、『読売新聞』に連載した記事を、改めて単行本にまとめたものである。金谷は知遇を得て、親任されていたからこそ、光瑞の執筆活動に助力していたのである。

金谷と光瑞との最初の接点は不明である。[17]周知のように、光瑞は広くアジアを視野に活動した仏教者である。[18]光瑞に師事するなかで、金谷はアジアに目を向け始めた。そして、東南アジア方面にて活動することになる。

（3）オランダ領東印度の渡航とイスラーム

前述のように、金谷は、日本大学で「回々教」を講義した。そのころ、イスラームが主流のオランダ領東印

度を訪問していた。その手掛かりとなる記述がある。一九四〇（昭和一五）年に茶業組合中央会議所（現・公益社団法人日本茶業中央会）の雑誌『茶』に、金谷は論考を寄せていたが、同誌の編集部が記した筆者の紹介文は、次のとおりである。

筆者の金谷哲麿氏は、実は真宗本願寺派の僧であるが、回教研究家としての方がより有名である。這回その研究の結実を得んが為と、各方面からの委嘱を請け、印度迄を志したのであるが、種々なる事情は遂に印度入りを許されず、蘭印を終点としなければならなかつた。が然しそこで図らずも、本文の如き興味ある茶の使者の役を果たして帰朝されたのである。[19]

つまり仏教が興隆したインドへの渡航を目指したが、イギリス領である同地に入域する許可が下りず、オランダ領の東インドにて視察を行ったのである。また引用文には「回教研究家」とあるが、金谷のイスラームに関する専門的な論文は確認できないが、大きな関心をもっていたことが推察される。

なお、雑誌『茶』への寄稿文は、興味深いので内容の骨子を紹介する。東インドのジャワ島では、蘭印政庁のオランダ人理事官と苦心の交渉の末、マタラム王国の国王弟で摂政のスリヨ・アミジョヨと謁見することができたという。ソロ王城に入り、茶葉組合中央会から託された茶器一式と銘茶一缶、日本から持参した写真集を摂政に献上して、金谷は茶をたてて、日本とジャワの関係を語り合ったという。また同じものを国王にも献上した。摂政は、日本事情に関心があり、その知識が深いことを、金谷は驚嘆している。この会見の数年前に、摂政は日本への見学のため渡航を準備したが、蘭印政庁の妨害があり実現できなかったという。オランダ側は、ジャワの植民地統治のため、現地民から信望のある摂政が、日露戦争で勝利した日本から学ぶことを恐れたからであった。なお、この時のジャワ視察の模様は、一九四〇年一〇月に愛知県名古屋市で講演した。[20]

三　台湾からインドシナへ

（1）　台湾南方協会の嘱託

金谷哲麿は、その後に台湾へ拠点を移した。それを知る手掛かりが、宇津木二秀（一八九三～一九五一）の遺品に残されていた。宇津木とは、金谷と同じ真宗本願寺派の僧侶で、一九四一（昭和一六）年に龍谷大学教授の身分で、興亜仏教協会（後に大日本仏教会へ再編）の使節として、台湾を経由してフランス領インドシナを視察した人物である。[21] 金谷が学んだ仏教大学において、宇津木は一学年上の人物でもある。

宇津木の遺品には、視察時に面会した人物の名刺が残っているが、金谷の名刺がある。それは「台湾南方協会嘱託／金谷哲麿」、「印度支那派遣軍司令部／嘱託　金谷哲麿」[22] の二種類である。

台湾南方協会とは、台北を拠点に東南アジア方面の調査活動や文化事業を行った組織で、植民地台湾を統治した台湾総督府と関係が強かった。金谷の所属部署は確認できないが、一九四一年時点における同会の概要は次のとおりである。

台湾南方協会

所在地　台北市表町一ノ二

主要役職員　（会長）斎藤樹、（常務理事）菊池門也、（調査部長）西沢基一、（東京支部長）菅原裕

組織　財団法人

設立　昭和十四年十一月

目的　地理的ニ南方各地ト緊密ナル地位ニアルト共ニ、産業、経済、国防上我ガ帝国々運南進ノ拠点ヲナス台湾ノ重大使命達成ニ協力シ以テ国策遂行ニ寄与ス

事業　一、南方ニ関スル各種ノ調査研究
二、南方発展ニ適スル人材ノ養成並ニ指導、斡旋
三、南方ニ関スル資料ノ蒐集
四、南方ニ関スル企業ノ指導及ビ紹介
五、南方ニ対スル文化事業

調査研究機構　調査部ヲ設ケアリ、調査部ハ西沢基一ヲ部長トシテ、部員三十余名ヲ以テ構成シ、必要ナル調査研究ヲナス、ソノ他ニ蘭印事情調査会及ビ南方事情調査委員会ニ総合セラレル三十数個ノ小委員会ヲ設置、委員ニ台北帝国大学及ビ台北高等商業学校ノ職員ヲ初メ官民ノ権威者ヲ委嘱シテ特定事項ニ関スル調査ヲ行ハシム

刊行物　南支南洋（月刊）

備考　本会ハ東京支部ヲ左記ニ置ク／京橋区銀座三ノ三、第一土地館内[23]

なお、台湾南方協会の調査部門は、一九四一年一一月に財団法人南方資料館として分離された。

（2）印度支那派遣軍の嘱託

金谷は、その後に日本陸軍の部隊の一つである「印度支那派遣軍」司令部に徴用されて、フランス領インドシナに駐在したのである。同軍は一九四〇（昭和一五）年九月の北部仏印進駐を機に編成された部隊で、一九四四（昭和一九）年一二月には第三八軍に改称した。

金谷が、印度支那派遣軍の司令部附の嘱託となった時期は定かではない。しかし遅くとも一九四一年秋には着任していた。調査のためインドシナを訪れた大正大学講師で天台宗僧侶の上村真肇（一九〇七～一九六四）

は、一九四一年九月一六日の出来事として、次のように記している。

夕刻、……サイゴン〔現・ホーチミン〕一流のホテル、マヂエスチツク〔同地に現存〕の○○（ママ）部隊に軍嘱託金谷哲磨氏を訪問した。同氏は真宗西本願寺の僧侶で、宇津木氏と同窓の由。先般渡泰の久野〔芳隆、大正大学教授〕氏や、浅草寺の事等もよく知つて居られ、大変懐かしく感じたが、丁度、軍の用務の為め他出せんとする所であつたので、僅かの間ではあつたが、談話。後日を約して辞した。[24]

一九四一（昭和一六）年一二月の開戦を経て、一九四二（昭和一七）年二月に金谷は一時帰国をした。二月一四日に西本願寺を訪問して、所見を述べている。マライから蘭印、ビルマに関する宗教事情を述べた上で、日本の取るべき態度を示している。

よく日本内地の仏教家の人からシヤムやビルマは九割五分以上が仏教徒だときます。その通りでウソはありません。この方面の仏教はセイロン系の所謂南方仏教である。その精神は別としても釈尊出世の当時そのままの姿を現在でも行儀的に厳守して居るのである。がそれを日本内地の仏教徒の人々が容易に考へて日本大乗仏教をスグそのままもつて行き何をするかれをするといふがそれは非常に危険な話です。第一彼れ等は日本のやうな大乗仏教を堕落せる仏教だと考へ釈尊を毒するものだと見て居るのです。よつてそれをウカツに軽々に妻をもつ日本僧、子がある大乗仏教僧が彼れ等とスグ握手しようとするとそこにおのづから意味の通ぜぬものがあるからその点などよくよくやつて行かぬと面白からぬものが生ぜんともかぎらぬ。即ち彼此よく了解して全ての話をすすむべきである。[25]

金谷は、かつてジャワ島を視察して、軍の用務でインドシナに滞在した経験から、日本仏教の形式を南方にそのままで移植することを慎むように強く指摘したのである。同じ趣旨の発言は、真宗本願寺派の機関紙『本願寺新報』にも述べている。[26]

四　マライ、シンガポールでの活動

（1）第二五軍軍政部

金谷は、次いで印度支那派遣軍から南方軍隷下の第二五軍に移り、部隊の移動と共にインドシナからマライに渡った。一九四二（昭和一七）年二月にシンガポールの陥落後、第二五軍は、行政機構として第二五軍軍政部を設置した。初期における陣容は、次のとおりである。

第二五軍軍政部員（高等文官）一覧表（一九四二（昭和一七）年三月三〇日調）（抄）

総務部　〈行政〉古山丈夫、小野裕、〈宗教〉山内秀三、（金谷哲麿）、〈司法〉野木新一、〈国際法〉豊田薫、〈防疫〉（軽部浩）、（安藤公三）、〈民族〉赤岡孝雄、〈労務〉星野五郎、〈調査〉（千倉武夫）、鶴見憲

産業部　〈部長〉鈴木重郎、〈鉱業〉関口一元、沢井隆義、〈鉱業（油）〉吉田良雄、〈農業〉弘長務、小野田快雄

財務部　〈部長〉原久一郎、〈財務〉（柳田桃太郎）、〈管財〉（守屋猛夫）、〈金融〉中平栄利、〈通貨〉武藤周太郎、小幡次郎、〈税関〉木谷忠義、大塚力司、〈専売〉中村一郎

交通部　〈部長〉壷田修、〈鉄道〉高畑襄、笠谷孝、〈船舶〉壷井玄剛、〈港湾〉天野良吉、〈通信〉鈴江静雄、杉山栄蔵、〈土木〉天埜良吉[27]

参照した名簿によれば、「（　）内ハ、充当予定者ニシテ未発令ノ者ヲ示ス」とあり、軍政実施初期の金谷は、総務部での宗教行政担当の候補者であったが、未着任であったことが伺える。ただし、金谷が実際に着任した

かについては定かではない。第二五軍軍政部は、後に第二五軍軍政監部（通称・昭南軍政監部）に改組される。

（2）昭南興亜訓練所の主事

本論の冒頭で、「マレー興亜訓練所」について井上憲司の証言を引用した。この組織は、第二五軍軍政監部が運営した昭南興亜訓練所である。後に馬来興亜訓練所も設立された。[28]

しかし引用した二書の文献では、同訓練所の位置づけを明確に記載しておらず、先に引用したように、「ひとつ現地人教育を始めようと話がまとまり、マラッカ市に『マレー興亜訓練所』を設立した」[29]との井上の発言を紹介しており、井上及び金谷らが個人的な動機で始めた事業かのように、読み手が誤読してしまう可能性がある。

特に、宗派の公式な通史たる『浄土真宗本願寺派アジア開教史』には、「マレー興亜訓練所での日本語教育」の小見出しにて再掲載されたが、同書において「けれども訓練生は浄土真宗の教義を学ぶことなく、「天皇」や「忠孝」の意味理解にも及ばなかった」[30]という井上の証言に基づいた記述は、あたかも本願寺が主体であるかのごとく、読者の誤解を与えかねない。あくまで、陸軍の軍政の一環として、訓練所を拠点とした現地青年に対する人材育成事業に、本願寺派出身者が軍の身分で関与していたという点を強く指摘しておきたい。

昭南興亜訓練所は、一九四二（昭和一七）年五月一五日に開設された。初代の所長は、第二五軍軍政部宗教教育課長で陸軍少尉の小川徳治（一九〇五～二〇〇一）が就任した。小川は、立教大学予科教授から徴用された人物であった。[31]

社団法人同盟通信社（現・一般社団法人共同通信社及び株式会社時事通信社）が配信した記事には、同年八月における訓練所の模様を報じている。主事に就任した金谷の名前もあるので、長文となるが引用する。

【昭南九日発同盟】 昭南市の中心から約十キロ東北方の高い椰子樹に囲まれて建つてゐる清潔な感じの二階建が興亜訓練所の校舎である。この訓練所はマレー軍政部が将来マレーの官吏として新生マレー建設の重責を担う現地人の青年を集めて、日本精神に基く鍛錬を行ふべく去る五月十五日開設したもので、生徒は現在第一期生として八十七名がをりマレー人、印度人、支那人、混血児等人種は雑多だが何れもマレー各州から特に選抜され知事の推薦により入所した優秀な若人たちである。彼らはこの訓練所で三ケ月の訓練をうけ、本月中旬卒業のうへ各州の官吏として任命され現地人の指導に当ることとなつてゐる。日本精神による鍛錬が目的であるだけに生徒一同も日本人の教官も素晴らしい意気込で、門内に一歩を踏み入れると所内の隅々にまで打てば響く張切つた空気が感ぜられる

校舎の階下は教室と食堂、階上は宿舎に充てられ、ここで生徒一同が全く軍隊式の共同生活を行つてゐる。各自のベットや衣類棚はキチンと整理され塵一つ落ちてゐない。階下の掲示場には「日課」が貼出してある。日本語で「七ジ三〇プンキシヨウ、八ジチヨウレイ、八ジ二〇プンセイソウ、九ジチヨウシヨク」と全部片仮名で記してある。訓練所の主事は龍谷大学教授〔出身のことか〕金谷哲麿氏で、氏以下九名の日本人教官が生徒と起居を共にし献身的な教育に当つてゐるがその努力は見事に実を結んで最近では殆ど英語を使用せずに日々の日課が進められるやうになつた。生徒の服装は戦闘帽にカーキの半袖シヤツ、半ズボン、左の胸に日の丸と各自の名前を片仮名で書いた布片が縫つけてある。号令はもちろんすべて日本語「整列」「右へならへ」「番号」そのテキパキした動作、行進も上手だ。日本語の号令が聞きなれずに動作を間違へる者が時をり一、二目につくが、手を高く振り足を踏みしめて気魄のこもつた訓練が炎天下の芝生に続けられて行く（中略）。食事は階下で教官と全生徒が一緒に集つてとる。諸人種が集つてゐるので、献立を作るのにも陰の苦心が大変なのだそうだ。(32)

昭南興亜訓練所にて、一九四二年五月から七月まで教鞭をとった英語学者の毛利可信（もうりよしのぶ）（一九一六～二〇〇一）は、訓練所の教育方針を回顧した記録のなかに、「語学教育ということには〔所長〕小川〔徳治〕さんや〔主事〕金谷さん、そしてわれわれ〔教官〕も関心がありました」[33]と証言をしている。

昭南興亜訓練所は、一九四三年七月に閉鎖されて、この間に三期生約二八〇名の教育を行った。それに代わって、一九四三年二月にマラッカにて、馬来興亜訓練所が開設され、敗戦までに八期生約八〇〇名の教育を行った。軍政監部の直轄の訓練所で、一七歳から二五歳までの優秀なマラヤの青年が訓練を受けた[34]。所長は陸軍教授の城戸甚次郎が就任した。

（3）陸軍司政官の就任

軍の嘱託であった金谷は、一九四三（昭和一八）年六月二九日付で、陸軍司政官四等が発令された[35]。民間出身である金谷が、行政に従事する陸軍司政官に任用された制度とは、一九四二（昭和一七）年九月三〇日に「陸軍司政官及海軍司政官特別任用令」（昭和一七年勅令第一三四号）が施行されたことに基づく。

それまでは各省の官吏が軍政要員として派遣されたが、本勅令により、文官高等試験の合格者ではない民間人も、各省からの推薦により高等試験委員の詮衡を経て、司政官に任用されることになった。これにより軍政機構に勤務する人員を確保することができたのである。

南方占領地の宗教行政に際して、当初は文部省から官吏が派遣されたが、同特別任用令により宗教界からも選抜された。

この特別任用令が施行された一九四二年九月三〇日と同じ日付けにて、文部省からの推薦により、南方軍政における宗教担当の陸軍司政官として、第一陣として四名の僧侶が任命された。駒澤大学元教授の渡辺楳雄

（曹洞宗）が高等官三等、井上憲司（真宗本願寺派）は高等官六等、高橋照空（真言宗〈一九四一年の合同前は新義真言宗智山派に所属〉）と稲田海誠（日蓮宗）は高等官七等となった。初任地は渡辺・井上・稲田が昭南の第二五軍司令部附、高橋がラングーンの第一五軍司令部附であった。[36] この井上が、本論冒頭で引用した『アジアの開教と教育』及び『浄土真宗本願寺派アジア開教史』における証言者である。[37]

金谷は、高等試験委員による事務処理番号「詮衡第一四三二号」として、「宗教ニ関スル陸軍司政官」[38]となり、引き続き馬来興亜訓練所にて、今度は軍服を着た行政官である陸軍司政官の立場から、教育に当たった。

五　南方特別留学生

（1）制度の概要

日本政府は、南方各地域から、日本本土の高等教育機関に留学させて将来の指導者として養成すべく、「南方特別留学生」の制度を一九四三（昭和一八）年から開始した。[39] 一期生は上流階級や高官の子弟が条件として選抜されたが、南方特別留学生の二期生は、条件が緩和された。二期生は引率者一二名、学生は八九名であった。学生の内訳はジャワ二〇名、マライ四名、スマトラ九名、ボルネオ二名、ビルマ三〇名、フィリピン二四名になる。[40]

南方各地からシンガポールに集まり、複数の船舶に分乗してから出発したが、マライからの学生は帝立丸（帝国船舶管理委託）に乗船した。

一行は、一九四四（昭和一九）年六月八日に、門司港に入港した。鉄道移動を経て一〇日には東京駅に着き、

各所訪問、明治神宮と靖国神社の参拝、学力検定を経て、一九日には国際学友会日本語学校に入学した。

二期生のマライ班の四名は、現地から金谷が引率してきた。その人物と年齢は、イブラヒム・ビン・アハムッド（一八）、ハッサン・ビン・アハマッド（一七）、アブドゥル・ラザク（一八）、ユソフィ・アブドルカダル（二〇）[41]である。引率者一名と留学生四名の渡航費用は、三〇四円九五銭で、現地からの旅費、食費、宿泊費、荷物運搬費、添乗員の心付けであった。[42]

なお別のビルマ班を引率した陸軍司政官の平松竜英は真宗大谷派、軍属の中島玄良は日蓮宗の出身であった。ビルマは仏教国であったため、日本の軍政機構に、多数の僧侶が任用されていたのである。

南方特別留学生の二期生は、日本に到着後、東京市淀橋区柏木（現・東京都新宿区北新宿）の財団法人国際学友会の日本語学校で語学研修を受けて、各地の教育機関に散っていった。その後のマライ班は、次のとおりである。[43]イブラヒム・ビン・アハムッドは徳島高等工業学校（現・徳島大学工学部）、ハッサン・ビン・アハマッドは陸軍士官学校、ユソフィ・アブドルカダルは京都帝国大学（現・京都大学）法学部である。アブドゥル・ラザクは、後述する。

一九四四（昭和一九）年六月一六日に、東京市麹町区の大東亜会舘（現・東京会舘）にて、財団法人国際学友会による南方特別留学生引率者の懇談会が行われた。マラヤ班を引率した金谷は次のように説明をしていた。

マライ班　金谷司政官

一、留日学生人員ハ十名トノ指令アリタルヲ以テ昭南特別市及ビ他ノ七州ヨリ各二名ノ候補者ヲ推薦セシメ、準備教育ノ情況、家庭事情ノ考慮ノ上十名ヲ採用ノ方針ヲ定メタリ。市及ビ州ニ於テハ、ソレゾレ募集ノ方法ヲ異ニシ、マラッカ州ノ如キハ地方英字新聞、マライ語新聞ニ広告ヲ出シ卅五名ノ応募者中二名ノ応募者ヲ採リタリ。本年ハ昨年度ノ如クナルベク名門出身者ヨリ採用トノ指令ハ無カリキ。政庁

ニ於テハ大体候補者ノ目当ツキ居リタリ。二月十日ニ候補者十五名（パハン州ノミハ候補者一名ノ為）昭南ニ集合、マライ興亜訓練所ノ一部ニ合宿セシメ約七十日間訓練ヲ実施セリ。日課ハ、ジヤワ班ノソレト大差ナク七時三十分起床、九時朝食、午前中四時間ノ授業、午后一時二十分ヨリ六時迄授業、教練、体操、音楽等ヲ実施セリ。授業ノ内容ハ日本語ヲ主トシ大東亜概説、東洋歴史（外人ノ東洋侵略史）、日本事情等ナリ。後ニ至リ採用人員ガ四名ニ変更セラレタルニ依リ、成績順ニ依リ首位ヨリ四位迄採用セリ。尚訓練ヲ終ヘタル残余ノ者ハ、本人ノ人物、家庭事情、政庁ノ意向ヲ考慮シ、更ニ高度ノ教育ヲ施シ次年度ニ備ヘル事トシ、希望者ヲ同所ニ留メ置キタリ。[44]

以降、金谷による発言の趣旨は、「二」から「六」の項目で紹介している。二でマラヤの教育制度、三でマライ班学生の特徴、四で同班学生の希望進学先、五で現地軍政監部の育成方針、六で現地では前年度留学生の反響がないことを述べている。

（2）アブドゥル・ラザク

南方特別留学生二期生のマライ班のアブドゥル・ラザク（一九二五～二〇一三）は、戦後の日本とマレーシアの友好に関わった人物である。

イギリス統治下のマラヤのペナンに生まれ、少年時代にクアラルンプールに移り、カンボンバハル・マレー国民学校に学んだ。一九四二年の日本軍占領後は、西警備隊日語学校で三か月の講習を受けた。マラッカの馬来興亜訓練所を経て、セランゴール州文教科の日本語教師となった。その後、南方特別留学生に選抜された。学籍簿によれば、「家ハ貧ニ近シ、州政庁ガ本人留学中家族ノ全責任ヲ約ス」[45]とあり、留学できる家庭ではなかったが本人の能力を評価されたからである。また人物評には「研究心、理解力ニ富ム、努力家、感情繊細」[46]

とある。そして、金谷が引率するマライ班の一員として、一九四四（昭和一九）年六月に日本へ渡ってきた。

アブドゥル・ラザクは、国際学友会で日本語教育を受けた後に、一九四五年四月に広島文理科大学（現・広島大学）に進学した。同大での南方特別留学生は一期生及び二期生の九名が学んでいた。同年八月六日に大学での授業中に原子爆弾が投下され、マライからの学生二名が没したが、ラザクは生き残り、直後には救援活動を行った。日本の敗戦により、勉学の半ば、同年九月に帰国を余儀なくされた。[47]

金谷は、人材育成に関わっていたことになるが、かつて大谷光瑞から武庫仏教中学における教育について聞いていたのであろう。

南方特別留学生二期生を引率した後の金谷について、詳しい履歴は分からないが、マライに戻った後に、一九四五（昭和二〇）年七月二二日に戦病死であったことが記録に残っている。最後の場所は、マライのケダ州アロースター市で、当時の同州は日本軍の施策によりタイ領として割譲されていた。

六　おわりに

以上、金谷哲磨の経歴を論じてきた。その生涯は、近代日本と東南アジアの関係史を見る上で、興味深い存在であるといえよう。

従来までの宗教研究において日本仏教のアジア関与に関する成果では、宗派を単位とした布教の視点から論じられることが多く、金谷のように宗派の外で活動した人物は、研究の範囲から除かれてきた。そして当時の時代の文脈を見ないで、評価の対象とされてきたのである。一方で、近代史研究においては、仏教者を含む宗

教者の存在を過少に見る傾向があり、政治や軍事に関与した宗教者を等閑視してきた。近代の仏教者の場合、人脈と知識を持ち、諸言語を習得した人物が少なからずおり、画策と謀略の裏面にて動いた。

金谷が所属した浄土真宗本願寺派の場合、事情が複雑である。近代の同派の研究に際しては、人物の扱いに躊躇があったことは否めない。それは、金谷と関係があった、大谷光瑞が絡むからである。光瑞は財政問題の責任から法主を辞任して宗派から離脱した経緯があった。また光瑞の妻籌子は、九条家の出身で、妹は大正天皇の后である貞明皇后である。すなわち、大谷家と天皇家は親族関係であった。門信徒と共に歩む現在の教団からすれば、過去の歴史は評価が難しい課題が多いのである。

近代の仏教者について、今の仏教界と教団の価値観と論理から、その是と非を問うことは、あまり建設的ではない。当事者が生きた社会と政治の情勢、大日本帝国憲法下の天皇の位置、西洋列強の植民地分割なかの日本など、複合的な要因の中で見る必要があろう。教団外から教団内を見ることで、外部で活動した金谷のような人物が浮かび上がるのである。

金谷と光瑞との関係は、本論で述べた以上のことは判明しなかったが、浄土真宗本願寺派関係者にあるアジア関係人材の輩出には、間違いなく光瑞の存在が大きい。彼らの思想背景には日本のアジア進出があり、結局は帝国主義と戦争の時代に呑み込まれた。時代の限界はあるが、海外を見ようとした姿勢は、現代にも通じる考えるべき課題である。

最後に、金谷のアメリカ及び東京時代における近しい間柄であった、前記した小松雄道のことを述べて本論を終えたい。神奈川県足柄下郡箱根町の箱根神社境内には、親鸞聖人像が建てられている。神社に像があるので、意外に思う人もいるだろう。箱根は、東国で布教した親鸞が京都へ戻る際に通った由緒地である。戦前に全国大学教授連盟理事長を務めた小松は、戦後には全国の大学の総長や学長等に呼びかけて、殉国学徒英霊奉

賛会を結成して、勧募活動を行った。一九六四（昭和三九）年に「殉国学徒慰霊の像」として建立されたのがこの親鸞聖人像である。奉賛会は戦没学生を供養するために結成されたが、慰霊像を親鸞にしたのは小松らしいところである。仏教者として小松は、戦没学徒のほか、あらゆる戦争犠牲者の存在を思っていただろうし、不幸にもマレーで戦病死した金谷のことも、忘れていなかったに相違ない。

註

（1）拙著『戦時下の日本仏教と南方地域』（法藏館、二〇一五年）を参照のこと。なお本論において、一次資料からの引用に際しては、適宜に句読点を補い、必要に応じて算用数字は漢数字に置換した。

（2）小島勝「第Ⅱ部第一章　本願寺派開教使の日本語教育」（小島勝・木場明志編『アジアの開教と教育』法藏館、一九九二年）、二〇〇頁。なお同論文の初出は、小島勝「戦前のアジア地域における本願寺派開教使の日本語教育　その二」（『仏教文化研究所紀要』第二六号、龍谷大学仏教文化研究所、一九八七年）。引用文にある井上憲司への聞き取り調査は、遅くとも一九八七（昭和六二）年以前に行われ、当時の井上は七〇代後半であった。

（3）浄土真宗本願寺派国際部・浄土真宗本願寺派アジア開教史編纂委員会編『浄土真宗本願寺派アジア開教史』（本願寺出版社、二〇〇八年）、二六九頁。

（4）龍谷大学創立三七〇周年記念誌編纂室編『龍谷大学戦没者名簿―龍谷大学創立三七〇周年記念誌』（龍谷大学、二〇一一年）、「金谷哲麿」（二三七頁）。

（5）全日本仏教会寺院名鑑刊行会編『全国寺院名鑑』（全日本仏教会寺院名鑑刊行会、一九六九年）、「大分県」の部の八頁。

（6）龍谷大学校友会編『校友名簿　昭和四三年度』（龍谷大学校友会、一九六九年）、一〇頁。

（7）土屋詮教編『仏教年鑑　昭和十一年版』（仏教年鑑社、一九三五年）、一八四頁。なお、日本大学法文学部宗教学科及び専門部宗教科の後継組織が作成した資料に、日本大学哲学研究室編『日本大学哲学科七〇年の歩み』（日本大学哲学研究室、一九九五年）がある。同書は、学事資料に基づき過去における講座と担当者が記載されているが、資料不足から全てを網羅

しておらず、金谷哲麿の氏名は確認できなかった。

(8) 金谷哲麿「東亜共栄圏と蘭印問題—世界環視の標的たる蘭印に就て語る」(『講演時報』第六〇〇号、連合通信社、一九四〇年一〇月)、一五頁。

(9) 小松雄道の略歴は、「号、入道 ○明治二十六年七月長野県松本市に生る ○真本〔真宗本願寺派〕 ○日本大学高等師範部並に日本大学宗教科卒業、コロンビア大学卒〔中退か〕、マスター、オブ、アーツ〔文学修士〕、巣鴨中学理事、財団法人協補会理事長 ○教改新聞社長、日本大学教授、日本宗教会理事長 ○東京都下和田堀之内町和泉一八一、宇宙荘」(土屋詮教編『昭和五年 仏教年鑑』仏教年鑑社、一九二九年、四八九頁)。住所にある宇宙荘とは、日本大学宗教科の準機関誌『宇宙—文化雑誌』の発行元である宇宙社が所在していたと考えられる。日本大学学長(一九三三年から総長)の山岡萬之助が監修者として、一九二五年から一九四二年まで刊行した。小松と日本大学の関わりについては、小松の『日本大学興隆秘史』(共栄書房、一九七四年)を参照のこと。

(10) Buddhist Churches America ed., *Buddhist Churches America: A Legacy of the First 100 Years*, San Francisco: Buddhist Churches America, 1998. pp.58, 294.

(11) 小松雄道『乱世の一燈』(帝都日日新聞社・実業之世界社、一九六七年)、四一頁。

(12) JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C04011190700(第五画像目)、昭和七年三月一四日〜昭和七年三月二八日、「満受大日記(普)其六 二/二」「便乗許可の件」(防衛省防衛研究所)。

(13) 前掲、JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C04011190700(第四、一三画像目)。なお、同文書によれば、一九三二年当時に金谷は「豊多摩郡杉並町馬橋三一六」(第七画像目)に居住していた。一九三五年には、前掲『仏教年鑑 昭和十一年版』によれば、「神奈川県鎌倉小町三一八」(一八五頁)に転居した。

(14) 無署名「全米大学総長に満洲事情報告/水野錬太郎氏を会長に陣容一新した「大学教授連盟」が」(『時事新報』一九三二年六月二〇日)。引用は、神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「新聞記事文庫」に基づく。なお満洲視察後にまとめた資料として、小松雄道編『満洲国の民心を認めよ—支那人の性格に就て』(全国大学教授連盟研究会、一九三二年)がある。

(15) JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C04011670200(第五、六画像目)、昭和八年八月五日〜昭和八年八月三一日、「満受大日記(普)其六 一三 二/二」「便乗許可の件」(防衛省防衛研究所)。

(16) 大谷光瑞著、金谷哲麿編『世間非世間』(実業之日本社、一九三一年)。

(17) 金谷は、本山の本願寺と関係があった。一九四〇（昭和一五）年初頭に、子息の金谷哲生が物故したが、本願寺から「宝池院」と諡号された。無署名「金谷哲磨氏令息」（『中外日報』第一二一六四号、中外日報社、一九四〇年三月八日）、三頁。

(18) 柴田幹夫『大谷光瑞の研究―アジア広域における諸活動』（勉誠出版、二〇一四年）。

(19) 金谷哲磨「蘭印に茶の使して」（『茶』第一巻第七号、茶業組合中央会議所、一九四〇年一〇月）、二〇頁。

(20) 前掲、金谷哲磨「東亜共栄圏と蘭印問題―世界環視の標的たる蘭印に就て語る」、一五～三二頁。本稿は、一九四〇（昭和一五）年一〇月一〇日に、愛知県名古屋市の新愛知社大講堂で行われた講演録である。

(21) 前掲の拙著『戦時下の日本仏教と南方地域』所収の「第Ⅱ部第一章　興亜仏教協会のインドシナ調査」を参照のこと。

(22) 大阪府高槻市、浄土真宗本願寺派正徳寺蔵。

(23) 富樫長英編『東亜調査関係団体要覧　昭和十六年』（東亜研究所、一九四一年）、三〇〇～三〇一頁。

(24) 上村真肇「仏印に於ける七日間　七」（『教学新聞』第二三四二号、教学新聞社、一九四一年一二月一一日）、一頁。

(25) 無署名「蘭印ビルマの宗教に就て／金谷哲磨氏談」（『中外日報』第一二七四三号、一九四二年二月一五日）、三頁。

(26) 金谷哲磨「南方の宗教事情〔一〕～三」（『本願寺新報』第九五四～九五六号、本願寺新報社、一九四二年二月二五日、三月五日、三月一五日）、各一頁。

(27) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C13071018500（第二、三画像目）、「第二五軍軍政部員（高等文官）一覧表」、一九四二（昭和一七）年三月三〇日調。本資料は第二五軍の行政組織である軍政部の発足当初における機構全体を示したものだが、軍政顧問、州知事、昭南特別市長、昭南島支部は省略して、本論に関わる要員のみ記載した。

(28) 昭南興亜訓練所については、ポール・H・クラトスカ著、今井敬子訳『日本占領下のマラヤ　一九四一―一九四五』（行人社、二〇〇五年）、松永典子『「総力戦」下の人材養成と日本語教育』（比較社会文化叢書一一、花書院、二〇〇八年）を参照のこと。

(29) 前掲、小島勝「第Ⅱ部第一章　本願寺派開教使の日本語教育」（『アジアの開教と教育』）、二〇〇頁。

(30) 前掲、『浄土真宗本願寺派アジア開教史』、二七〇頁。

(31) 「小川徳治教授略歴、著書」（『立教経済学研究』第二五巻第三号、立教大学経済学研究会、一九七一年一一月、三―五頁）には、南方戦線での軍歴が記載されていない。

(32) 無署名「日本語教育に重点／打てば響く現地人青年の意気／昭南興亜訓練所を視る」（『神戸新聞』一九四二年八月一〇

日）。引用は、神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「新聞記事文庫」に基づく。

(33) 「インタビュー二二　興亜訓練所の教官時代　毛利可信」（日本の英領マラヤ・シンガポール占領期史料調査フォーラム編『インタビュー記録　日本の英領マラヤ・シンガポール占領（一九四一～四五年）―インタビュー記録』南方軍政関係史料三三、龍溪書舎、一九九八年）、六一一頁。なお同書の口絵には、「昭南興亜訓練所本部前教官一同（昭和一七年八月）」の見出しで集合写真が掲載され、主事の金谷哲麿は中央に写っている。

(34) 前掲、『インタビュー記録　日本の英領マラヤ・シンガポール占領（一九四一～四五年）』、「人名・事項解説」（六七六頁）。

(35) 「陸軍司政官（二十九日）」（『朝日新聞』第二〇五七三号、朝日新聞東京本社、一九四三年七月一日夕刊）、一頁。

(36) 無署名「南方の宗教対策強化／宗教関係の司政官発令」（『中外日報』第一二九三五号、一九四二年一〇月三日）、二頁。「岡山医科大学学生主事世良琢磨外三十二名陸軍司政官等任免ノ件」（昭和十七年・任免巻百七十八）、国立公文書館蔵（請求番号―本館／二A／〇二一／〇〇・任B〇三二五一一〇〇）。「陸軍文官名簿」（「南方軍政関係資料」所収）、防衛省防衛研究所蔵（請求番号―南西／軍政／六四）。南方軍政と仏教者の動員については、前掲の拙著『戦時下の日本仏教と南方地域』所収の「第Ⅱ部第三章　マラヤの占領と宗教調査」を参照のこと。

(37) 井上憲司は、新潟県長岡市出身の浄土真宗本願寺派の僧侶で、京都帝国大学で学んだ。一九四二（昭和一七）年九月三〇日付けで陸軍司政官となり、一九四六年五月八日付けで復員した。その後は、長岡の徳宗寺住職、長岡市仏教会長、長岡市議会の議員と議長を務めた。略歴は、山中龍淵編『日本宗教大鑑』（ブディスト社、一九七三年、九六七頁）、秦郁彦編『南方軍政の機構・幹部軍政官一覧』（南方軍政史研究フォーラム、一九九八年、一〇八頁）を参照した。

(38) 「金谷哲麿外六名陸軍司政官等任官並免職ノ件」（「任免裁可書・昭和十八年・任免巻百三十九」、請求番号・任B03446100、件名番号・007、保存場所・国立公文書館本館、作成部局・内閣、年月日・昭和一八年六月三〇日）。

(39) 南方特別留学生については、上遠野寛子『改訂版　東南アジアの弟たち―素顔の南方特別留学生』（暁印書館、二〇〇二年（初版一九八五年））、藤原聡・篠原啓一・西出勇志『アジア戦時留学生―「トージョー」が招いた若者たちの半世紀』（共同通信社、一九九六年）、江上芳郎『南方特別留学生招聘事業の研究』（南方軍政関係資料二四、龍溪書舎、一九九七年）を参照のこと。上遠野は、南方特別留学生の第一期生に対して日本語や日本文化の教育に関わった。

(40) 独立行政法人日本学生支援機構の東京日本語教育センターが所蔵する旧・財団法人国際学友会の資料番号六二「昭和十九年度南特」に含まれる「昭和十九年度南方留学生名簿」。

(41) 前掲、「昭和十九年度南方留学生名簿」。
(42) 前掲、番号六二「昭和十九年度南特」に含まれる「マライ班上京諸費用受領書」。
(43) 前掲、藤原聡・篠原啓一・西出勇志『アジア戦時留学生―「トージョー」が招いた若者たちの半世紀』所収の「南方特別留学生名簿（計二百五名）」、二八九頁。当該の名簿は、国際学友会所蔵の学籍簿から江上芳郎が作成した名簿をもとに、加筆修正をしたものである。
(44) 前掲、東京日本語教育センター所蔵の番号六二「昭和十九年度南特」に含まれる「昭和十九年度南方留学生引率者トノ懇談会ニ於ケル懇談事項要録」、頁数無記。
(45) 前掲、東京日本語教育センター所蔵の番号三三「学籍簿　マライ」に含まれる「アブドル・ラザク」。
(46) 前掲、東京日本語教育センター所蔵の番号三三「学籍簿　マライ」に含まれる「アブドル・ラザク」。
(47) アブドゥル・ラザクは、イギリスから独立後のマレーシアで、マレー語教育、日本語教育、マレーシアと日本の友好に関わった。マラ工科大学インスティチュートで日本語講師を務め、首相のマハティールが提唱したルック・イーストの政策により産業技術研修生が日本へ派遣されることになり、日本語予備教育のプログラム責任者に就いた。二〇一二（平成二四）年に母校の広島大学から名誉博士号が贈られた。ラザクについては、オスマン・プティ著、小野沢純・田中和夫・山下勝男訳『わが心のヒロシマ―マラヤから来た南方特別留学生』（勁草書房、一九九一年）、宇高雄志『南方特別留学生ラザクの「戦後」―広島・マレーシア・ヒロシマ』（南船北馬舎、二〇一二年）、広島大学編『被爆した南方特別留学生への名誉博士号授与の記録』（広島大学、二〇一五年）を参照のこと。

【謝辞】本論の執筆に際して、浄土真宗本願寺派妙寿寺（大分県豊後高田市）の金谷則行住職より、金谷哲麿の遺品アルバムを貸与いただいた。御厚意に記して御礼を申し上げる。

（文化庁宗務課専門職、（専門）宗教学、近現代宗教史）